



鶉

衣

續編

上

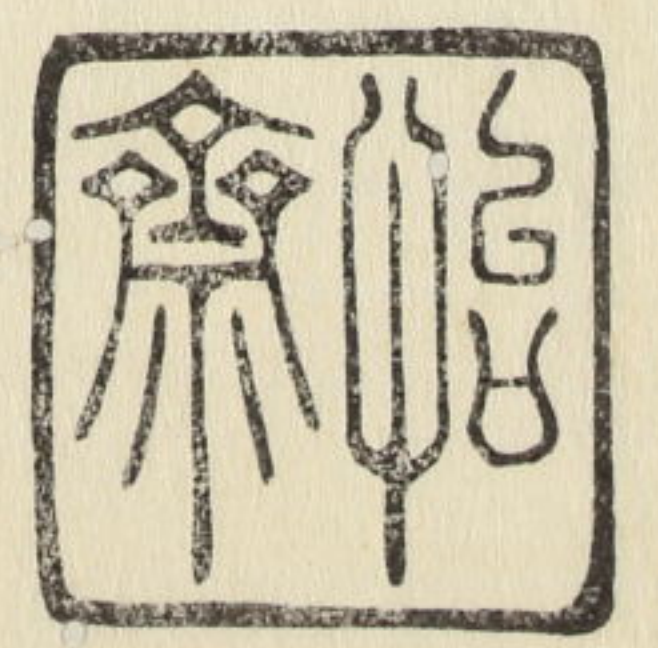
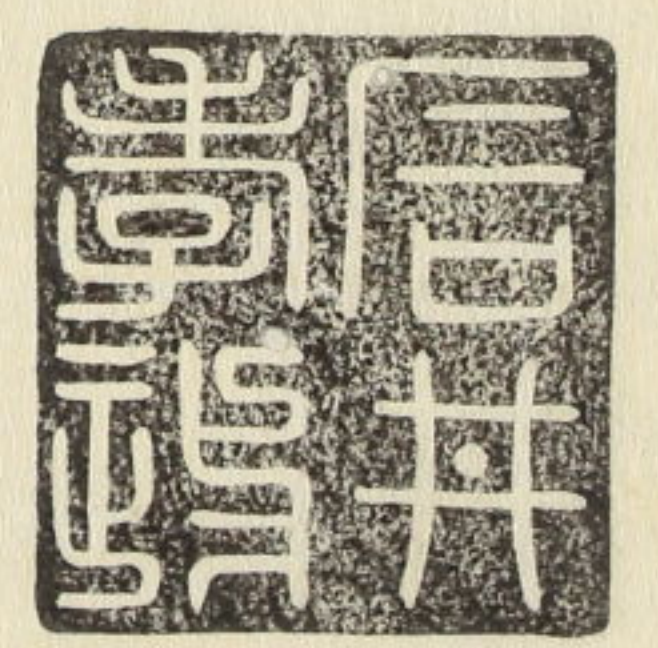


お申せし事なるは國に於ける御事
に於ける事は一なる事なるは半
也なる事なるは半なる事なる
君は事なるは事なるは事なる
事なるは事なるは事なる
君の事なるは事なるは事なる
事なるは事なるは事なる
事なるは事なるは事なる
事なるは事なるは事なる

十四

二巻のついでにこの稿のついでに
 三巻のついでにこの稿のついでに
 あまのついでに

江戸のついでに
 江戸のついでに



鶉衣續編上

一〇〇〇文章とて集めて或日腹は較し訊て

鶉衣續編上
 鶉衣續編上
 鶉衣續編上
 鶉衣續編上
 鶉衣續編上

尾形半蔵のついでに

よりたまつけ物とふにふれハ酔多ハ初多とハ其
名のとハ一あれハなとハ一富士の吉かたとハ一
あハ一あれハ一酒多とハ一其物其名の自由と
ハ一とハ一の名もよとハ一我才の藻屑とハ一
其江よとハ一酒腸のとハ一ハ仙の
仲満とハ一とハ一對とハ一飽のいハ一
是のハ田子のハとハ一

僧或人書

吾子今講武と以て軒号とハ一能階とハ一
名とハ一面白とハ一吾子のハ一武門のハ一
所賣とハ一暖い扇とハ一油賣とハ一

油屋と名のハ一買とハ一人のまハ一
いハ一あり吾子とハ一風雅の具負とハ一武とハ一
混せんとハ一私ハ一の迷ハ一ハ一槌とハ一
御とハ一扇とハ一交て教とハ一とハ一是ハ一
りてとハ一是とハ一とハ一とハ一とハ一
是とハ一害とハ一文武二とハ一和とハ一其事
人是とハ一愛とハ一とハ一とハ一とハ一
井ハ射法とハ一或人是とハ一評とハ一曰とハ一文の始
武士の武士具とハ一白異とハ一とハ一書とハ一人の侍り
とハ一武藝とハ一とハ一とハ一とハ一
蓋とハ一とハ一其書とハ一とハ一
とハ一藝の自慢とハ一侍者無人ヤ律とハ一とハ一侍の

破戒無慙と経學よりしりし人の不行なるを
あしきとありつてあしきとせしむる世にふくまの拾ね
しと異るも療治もふくまを可なり白蔵に口
を閉扁鼓しふくと袖より只つとせとるよりか
なり新當流も正法念流のしり武士の常より
それよりし出るとあしき誰か武に生れは是と
しりしとて二流三流の印可免許もけかた
たぐりしと天下の名人のしりし人とも世に
まると各人のしりしや世に馬とる人あつた上
入るの名もしりしと入道もなりしとて
おのり披露しりし昔も人教と自傳しりしこの教の
ふの契はしりし一定家家隆も教也達より

しりしは教也達一定家家隆もしりしとて
もしりしとてあしきとてしりしとてしりしとて
師匠の下もしりしとてしりしとてしりしとて
教のしりしとて遼東の承やめつりしとてしりしとて
しりしとてしりしの衆の思ひしりしとてしりしとてしりしとて
やつりしとてしりしの衆の思ひしりしとてしりしとてしりしとて
一方の油ひりしとてしりしとてしりしとてしりしとてしりしとて
其言もしりしとてしりしとてしりしとてしりしとてしりしとて
なりしとてしりしの衆の思ひしりしとてしりしとてしりしとて
何しりしとてしりしの衆の思ひしりしとてしりしとてしりしとて
川しりしとてしりしの衆の思ひしりしとてしりしとてしりしとて
は勝れしりしとてしりしの衆の思ひしりしとてしりしとてしりしとて

いふ人も其場は臨み其てはあつてさうねに不ろくとは
いふ人も其場は臨み其てはあつてさうねに不ろくとは
いふ人も其場は臨み其てはあつてさうねに不ろくとは
いふ人も其場は臨み其てはあつてさうねに不ろくとは
いふ人も其場は臨み其てはあつてさうねに不ろくとは
いふ人も其場は臨み其てはあつてさうねに不ろくとは
いふ人も其場は臨み其てはあつてさうねに不ろくとは
いふ人も其場は臨み其てはあつてさうねに不ろくとは
いふ人も其場は臨み其てはあつてさうねに不ろくとは
いふ人も其場は臨み其てはあつてさうねに不ろくとは

能席控

一 袴と取つては辞交わすまゝに
一 夜更て時を向ふこと
但猪子の斬はゆるく
一世同れはわやく人々の王術の塵尾と揮
法圓の居眠はあ
右先達ての定はわれと捨て菴の新制と飲食
もつり亭のりるたれは客のつ得は及
且の言は似るんも口をたあ茶も
いふ人も其場の茶のあは茶のあは茶のあは茶のあ

裏版も刻三石の内へあぐり

婦人能席定

- 一 飯はちり茶専用あぐり汁をさし勿痛みたる
- 一 茶はちり汁あぐり
- 一 茶はちり茶専ら有る印を珍奇を必おむる
- 一 茶の時ハ豆腐茄子は糖をうるぬ言符ハつぎ
- いふものあぐりんや
- 一 考の物ハ痛すま及ま
- 一 一ハ麵おの好ありま定都ハ右は准ア
- 一 酒ハ盃は大小あれハ上ハ二献ハ酒ハ
- 酒ハさりいふ物ハすまぬ酒とすむ物ハ

宴會の〜ぬハ志してすむ〜
 なる〜も膳ハ一茶の〜
 者ハ名つけて一終〜
 雪やおの夜風ハ帰路の寒さと防むハ膳後の菓子
 残〜まで一す満尾の上ハゆいて一酌をめぐすも又
 其時の掬は〜と〜
 堅く皆〜と相撲サ居の果ハ必償は〜
 俳諧の集會の飲會ハ流〜
 其その秋ハ〜とやされハ公羽のち〜茶三石ハ皆人の
 口〜と〜其あ〜と思ぬ人女〜茶〜
 汁〜と〜者〜教た〜ハ〜て茶教と〜
 さ〜の繪のさ母の卒の〜茶の膳ハ〜

まじりて編むるの我ら御階の大綱あるをわが自主のよきとてむら
たうとていふるの困るはいつかあつたれ相成の事なりとて月令の始
ま

棧集小序

家庵は清せいぜい庵のぬき名をわい老るまのたゞくも本
の社よとて仮わ別れ決しとての春は惜れし早殿の片
手振る汁とあつてはえこのをきくは岐祖のりり孫
のやいさし我らこの春のいつかをさし一棧のあつては堆
の塚と築き旅客の不便しとて越路のちやと貞の
るの法とせりりて圃このを拾い今武蔵一鶴と休め
しとて白陽田の春一人は思はつてはよめり便しとて
告ぐぬ実の秋氏の流しとて取れぬ佛塔の位は

しとていふるの我ら御階の大綱あるをわが自主のよきとてむら
たうとていふるの困るはいつかあつたれ相成の事なりとて月令の始
ま
跡をまじりて編むるの我ら御階の大綱あるをわが自主のよきとてむら
たうとていふるの困るはいつかあつたれ相成の事なりとて月令の始
ま
や此院は清せいぜい庵のぬき名をわい老るまのたゞくも本
の社よとて仮わ別れ決しとての春は惜れし早殿の片
手振る汁とあつてはえこのをきくは岐祖のりり孫
のやいさし我らこの春のいつかをさし一棧のあつては堆
の塚と築き旅客の不便しとて越路のちやと貞の
るの法とせりりて圃このを拾い今武蔵一鶴と休め
しとて白陽田の春一人は思はつてはよめり便しとて
告ぐぬ実の秋氏の流しとて取れぬ佛塔の位は

ゆく方挽歌并序

ゆく方委道ハ一い天台の教入豆腐菟弱のほほ

引つらふれて踏るゝもさうも静まりとも何の向月
あゝ心は只は物の言世をさうりゝゝゝ人々もサ仕の
世につれはよあつゝゝあひをさうおまゝとあつゝ
いそゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
すゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
久ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
静ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
一語の言とあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

